

慶應義塾大学 井庭崇研究室
オープンダイアログの実践の秘訣をまとめた
『オープンダイアログ・パターン』を制作
- ORF2017 で 11 月 22 日に発表 -

慶應義塾大学 井庭崇研究室は、オープンダイアログの実践の秘訣をまとめたパターン・ランゲージ『オープンダイアログ・パターン』を制作しました。オープンダイアログは、フィンランドで生まれ実践されている対話の方法で、統合失調症をはじめとする精神疾患の治療で用いられているものです。オープンダイアログは、近年日本でも大きな注目を集めており、ひきこもりや教育、組織、日常生活のコミュニケーションの改善など、他領域での応用も始まっています。

今回制作した『オープンダイアログ・パターン』は、オープンダイアログの実践の秘訣を、30の言葉にまとめたものです。本成果は、11月22日（水）に東京ミッドタウンで開催される「慶應義塾大学 SFC Open Research Forum 2017 (ORF2017)」にて発表し、冊子をセッション参加者に限定して配布いたします。また、セッションでは『オープンダイアログ・パターン』カードを用いた対話のワークショップも実施します。さまざまな領域での問題の解消に寄与する可能性のある画期的な対話の方法です。ぜひご参加・ご紹介・ご取材ください。

□ オープンダイアログとは

オープンダイアログは、精神医療の現場における「対話」を中心としたアプローチで、フィンランドのユバスキュラ大学のヤーコ・セイックラ教授らが中心となって開発し、1980年代から実施されてきたものです。そこでは、通常は投薬治療や入院措置が不可避だといわれる統合失調症などの精神疾患に対して、「対話」のミーティングによる治療が行われています。

オープンダイアログでは、問題を抱えている本人だけでなく、周囲にいる関係者が招かれ、治療にあたる側も複数人のチームで関わります。ミーティングでは、参加者は車座になって対話を重ねていきます。そのなかで、これまで語りできなかった心の奥底に沈み込んだ記憶や体験を、一緒に言葉にしていくことで、それらがもつ意味が変容し、新しい理解が生まれます。その結果、驚くべきことに、妄想や幻聴などの症状が消え、問題が解消してしまうというのです。


本プロジェクトでは、このオープンダイアログの方法が、精神医療にとどまらず、教育や組織、日常生活のさまざまな問題に対する重要な方法になると、その可能性に注目しています。なぜなら、オープンダイアログが依拠するのが、人間や対話に関する根源的な思想であるからです。このような問題意識のもと、本プロジェクトでは、オープンダイアログの実践の秘訣を、精神医療の現場の方にも、教育、組織、日常生活のさまざまな問題の解消に取り組む方にも役立つようなかたちでまとめることを目指し、2016年より取り組んできました。










□ オープンダイアログ・パターン

今回制作した『オープンダイアログ・パターン』は、オープンダイアログの実践の秘訣を、30 の言葉にまとめたものです。オープンダイアログの中心となるのは、問題を抱えている本人の語りを聴くことで、本人の《体験している世界》を理解すること、そして、関係者の《多様な声》が出される対話の場をつくること、さらに、みんなで《新たな理解》が生まれることを目指すということです。


この《体験している世界》、《多様な声》、《新たな理解》を実現するために、それぞれ 9 つの実践パターンが言語化されています。










体験している世界



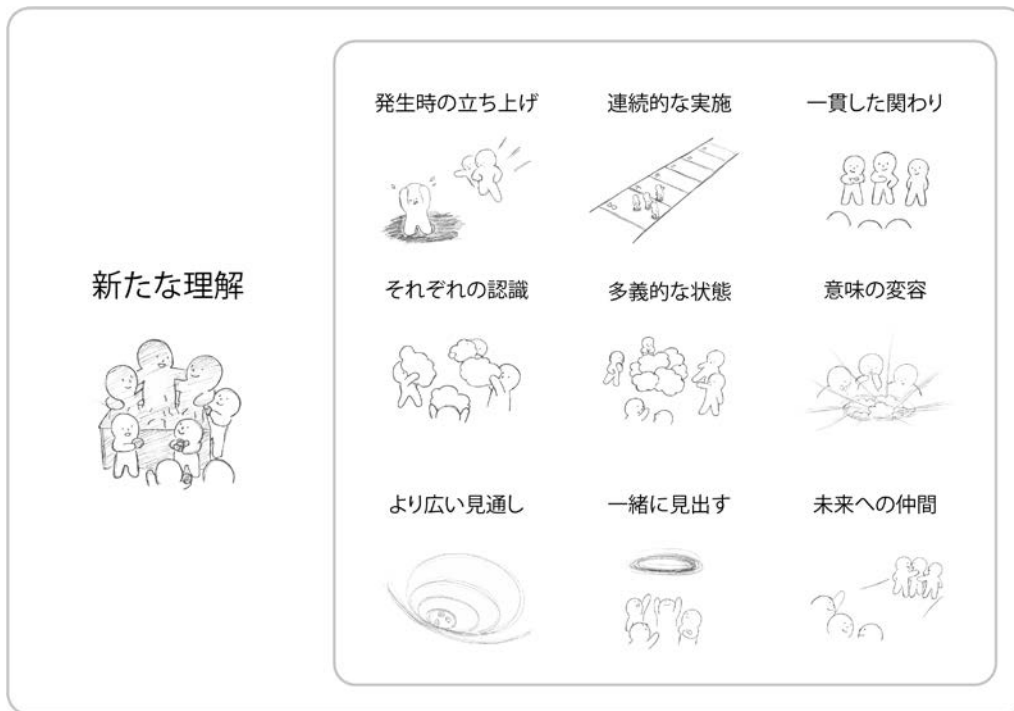
ひとりの人として 	じっくり聴く 	そのままの言葉 
開かれた質問 	言葉にする時間 	語りへの応答 
内側から捉える 	感情の通路 	これまでへの敬意 

多様な声



関係する人 	チームでの関わり 	輪になる 
全員の発言 	ゆったりとしたペース 	応答の連鎖 
小さなサイン 	気持ちの共鳴 	リフレクティング・トーク 

2/5



『オープンダイアログ・パターン』は、経験則（パターン）をまとめる「パターン・ランゲージ」という方法で言語化されているため、ひとつひとつの言葉は、「パターン」と呼ばれています（詳しくは後述）。それぞれのパターンは、どういう「状況」（Context）で、どういう「問題」（Problem）が生じやすいのか、そして、そうならないためにはどうしたらよいのかという「解決 / 解消」の方法（solution）が記述されています。

つまり、それぞれの状況での実践を支援する内容が、それがよいとされる理由とともに書かれています。そして、それらひとつひとつのパターンを指し示すための新しい言葉として「パターン名」がつけられています。この「パターン名」があることで、そのパターン（秘訣・コツ）について、考えたり話したりすることが支援されます。こうして、実践についての新しい語彙（ボキャブラリー）をつくることで、思考やコミュニケーションを支援するということが、パターン・ランゲージが目指すところなのです。

オープンダイアログの実践の秘訣・コツを、パターン・ランゲージのかたちでまとめるのには、いくつかの意義があります。

まず、精神医学におけるオープンダイアログの実践のための新しい支援方法となることです。これまでオープンダイアログについては、書籍や論文で紹介されてはきましたが、思想と実践の結びつきに重点が置かれることが多く、現場の状況に応じてどのように実践すればよいのかという観点からの表現が求められています。しかし、単なるテクニックのようにまとめてしまうと、オープンダイアログが重視している本質を取りこぼしてしまうので、オープンダイアログの思想をしっかりと体現しながらも、現場で実践しやすく、かつ、思考やコミュニケーションを支援できるようなかたちでのまとめが必要となります。実践的でありながら、背後にある考え方やニュアンスをも込めることができるパターン・ランゲージは、そのための形式として適切です。

また、オープンダイアログの実践をパターン・ランゲージとしてまとめることは、フィンランドとは制度・環境が異なる日本にオープンダイアログを取り入れやすくすること

に寄与すると考えられます。パターン・ランゲージをまとめるときには、具体的過ぎず、抽象的過ぎない適度な抽象化をするのですが、その結果、西ラップランド地方での地域固有の具体性からテイクオフできるというメリットがあります。パターン・ランゲージでは、個々のパターンが適度な抽象度で書かれているため、それを実践しようとする、自分の「いま・ここ」の状況に合わせた具体化をすることが必要となり、実際にそのような思考を促すのです。

さらに、オープンダイアログを精神医学以外の分野に応用しようとなると、一度、精神疾患の治療という文脈や語彙から離れて、オープンダイアログを説明・理解する必要があります。これは、主に表現の問題ではあるのですが、内容についても一部捉え直しが必要となります。そのような捉え直しも、オープンダイアログが大切にしていることや効果を損なわないように注意しながら、行なっています。

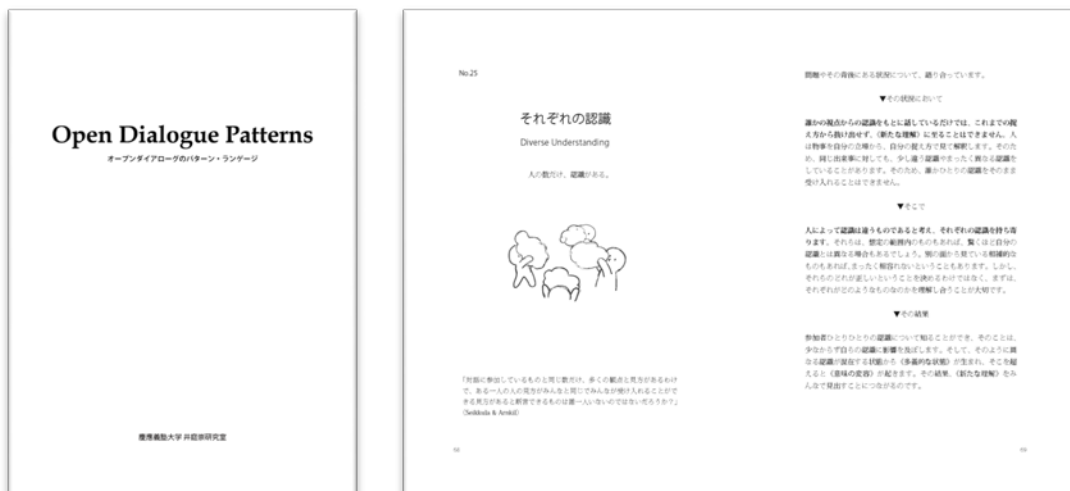
□ 『オープンダイアログ・パターン』の発表と体験の機会

『オープンダイアログ・パターン』は、11月22日(水)に東京ミッドタウンで開催される慶應義塾大学 SFC Open Research Forum 2017 (ORF2017)内のセッションにて発表し、『オープンダイアログ・パターン』カードを用いた対話のワークショップを体験していただきます。さらに、セッションの参加者には、『オープンダイアログ・パターン』の冊子を配布いたします。今回のセッション限定での配布となりますので、この機会にぜひお越しください。

日時：2017年11月22日(水) 17:30~19:00
場所：東京ミッドタウン・タワー 4階 カンファレンス Room 9
S-21「オープンダイアログについての対話：パターン・ランゲージによるアプローチ」
詳細：<https://orf.sfc.keio.ac.jp/2017/session/s-21/>

※入場無料・事前登録不要です。SFC Open Research Forum 2017 (ORF2017)については、<https://orf.sfc.keio.ac.jp/2017/> をご覧ください。

ORF2017のセッションで配布する『オープンダイアログ・パターン』冊子(全102ページ)



ORF2017のセッション内の対話で使用する『オープンダイアログ・パターン』カード



□補足：パターン・ランゲージとは

パターン・ランゲージは、建築家クリストファー・アレグザンダーが提唱した知識記述の方法です。アレグザンダーは、町や建物に繰り返し現れる関係性を「パターン」と呼び、それを「ランゲージ」（言語）として共有する方法を考案しました。彼が目指したのは、誰もがデザインのプロセスに参加できる方法でした。

つくる人と使う（住む）人を分断するのではなく、使う人がつくるプロセスに入り、その後も自分たちで改善していけるようにすることが、いきいきとした街や建物を生み出すために不可欠だと、アレグザンダーは考えたのです。ある「状況」で生じる「問題」をどのように「解決」すればよいのかという実践的な知を記述するパターン・ランゲージの方法は、ソフトウェア開発や創造活動一般を支援する方法として広がっています。

慶應義塾大学 井庭崇研究室は、パターン・ランゲージの方法を創造的な人間行為の支援に応用し、国内外で先導的な立場で研究・実践を進めています。これまでに制作した主なものとしては、「ラーニング・パターン」、「プレゼンテーション・パターン」、「コラボレーション・パターン」、自分らしい進路選択をするための「未来の自分をつくる場所」、認知症とともによりよく生きるための「旅のことば」、企画・プロデュース・新規事業を行うための「プロジェクト・デザイン・パターン」、主体的・対話的で深い学びを育むための「アクティブ・ラーニング・パターン《教師編》」、これからの時代の進路選択のための「未来の自分をつくる場所：進路を考えるためのパターン・ランゲージ」（ミラパタ）、読書のコツや楽しみ方を言語化した「Life with Reading」などがあります。

書籍として出版された『プレゼンテーション・パターン』は2013年度のグッドデザイン賞を受賞、書籍およびカードとして出版された『旅のことば』は、2015年度の認知症フレンドリーアワード大賞およびグッドデザイン賞を受賞しています。

*ご取材の際には、事前に下記までご一報くださいますようお願い申し上げます。

慶應義塾大学 ORF 事務局

TEL: 0466-49-3436 FAX: 0466-49-3494

E-mail: orf-info@sfc.keio.ac.jp

※11月21日～23日につきましては、03-3403-8610までご連絡ください。

*本リリースは新聞各紙社会部、web ニュース等に送信させていただいております。

【本リリースに関するお問い合わせ先】

慶應義塾大学 井庭崇研究室「Open Dialogue Patterns」プロジェクト

E-mail: opendialogue@sfc.keio.ac.jp

【配信元】

慶應義塾大学 湘南藤沢事務室学術研究支援担当

TEL: 0466-49-3436 FAX: 0466-49-3494

E-mail: kri-pr@sfc.keio.ac.jp